
天使達の鎮魂詩 revised

おかのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使達の鎮魂詩 r e v i s e d

【Nコード】

N 7 1 3 7 X

【作者名】

おかのん

【あらすじ】

『ぽ村ん家』というブログによくおじやまするんですが、そこで「女性キャラ全員殺害してFEプレイ」という、とんでもないプレイ日記がありました。

で、あまりに不憫な彼女達に日の目を・・・と投稿したお話を、こちらでうpしてます。

ファンの方からすればとんでもない展開のモノばかりだと思いますが、これも二次創作ならではの愛の形……

のつもりです。

自分設定もはいつてるので、「公式と違う」等のツッコミは・・・程々をお願いします。

また、ちよつとだけ残酷描写がきつめに書かれた18禁版もあり、実は本家はそっちです。

ほぼ同じ物ですが、興味があればどうぞ。

同グループノクターンの方で。

第1弾 シーダ編

ひゅっ・・・

ガルダの海賊共の突然の襲撃。タリス城に戻ろうにも戻れないこの状況。

嫌な予感がして、振り向いたその瞬間であつた。

爪楊枝のようなものが垂直に昇る。

目で追える様な間の抜けた速さで。

天馬が、堕ちる。

真っ白になる。何よりも自らが。

それが、最後。

・

オグマ・スビル。

彼は奴隷剣闘士であつた。

ノルダという都市で、命を元手に命をつなぐ。

奴隷であるからには、その生殺与奪さえ主のものだ。

それは、常識だ。

解つていても、不満はいくらでもある。

ある時、皆の待遇改善を求めて直談判をした。

コンディションを保てなければ、死の確率は当然高くなる。試合も白熱はしまい。主の利も考えたもつともな意見のはずであった。

もちろん却下された。

意見とは同等でないまでも、最低限、『同じ人間』からのものだ。豚の鳴き声など聞いていられるか。という答え。

オグマは仲間と逃亡計画を練る。結果成功するが、ギリギリの線で仲間を逃がすために盾になったオグマのみが捕らえられてしまう。

鞭打ちの刑がかせられた。

.

刑のようすは酷いものだった。

答える秘密を持たず拷問を受けるのと変わりない。

気絶する度に冷水をかけられ、それだけが5日も続いた。

オグマは文字通り死にかけていた。

そこにたまたまアカネイアに来ていた、シーダとタリスの騎士達が通りかかる。

シーダは、まだ6つ。

オグマには、わけが解らなかった。

自分の前で、泣きながら手を広げるこの少女はなんなのだ。

自分が奴隷なのは自覚している。

人間のつもりだが同時に家畜だという諦念がある。

そして、裏付けるものは山とあり、裏返すものはなにもなかった。
はずだった。

この少女は俺をかばっている。

一言も、かわいそう、と言わない。

どうして、と、繰り返す。

それは、衝撃だった。

この子には、俺が人間に見える。

それどころではない。同じ人間に見える。

そばに連れている騎士に気が付いた。

紋章を掲げる位置からして、間違いなく王族だ。

戦を任とする貴族である騎士をしたがえているのだ。例外はありえない。

俺を救うことだけ思いついたなら、

そばの従者に買い付けを命じればいいだけだ。

馬車から降りる必要さえない。

なのにこの子は、泣き喚きながら抗議している。

その小さな身体で、この俺を庇って。

声は震えている。足も。

この子は自分自身の身分の力が解っていない。

奴隷商人上がりの興業主など、そこらの田舎貴族辺りでも破滅させられる。

それを知らない。

鞭を持った、こんなことを平気でやる怖い大人にしか見えていないだろう。

にもかかわらず、その恐怖をかかえてなお、俺を庇って手を広げている……！！

オグマはこのとき、初めて、

『自分で自分を奴隷なのだと理解し、納得していた』ことを恥じた。同時に、『俺は、人でいいのだ』と、勇気を持てた。

結局、従者が交渉をし、オグマは買い取られた。

破格の幸運だった。

よかった。よかったと胸にすがり付いて泣く新しい主人は、

「ごめんね。こんなふうにしか貴方を助けられなかった」

と言った。

奴隷として、オグマを、『買う』

その行為さえ、オグマを傷つけてしまうと思っているのだ。

自分に限ったことではあるまい。

だが今、地に落ちてはじけるその涙は、オグマの為に流れている。

オグマは確信した。

もし俺が王に生まれついたとしても、
こんな気持ちにはならない。

俺は今、世界に祝福されている。

.

そして、10年。

英雄の血を継ぐ王子に、自国の危機を伝えた後、彼女は帰ってこなかった。

自分は何も出来なかった。

だが。

彼女が救い、見出した傭兵オグマは、ここにいる。

彼女がいなければ、ただの奴隷として朽ちた筈の男は、
彼女が抱いた理想を知っている。

姫を守るためだけに磨き続けた自分自身の意味を、
もう一度見つけなければならぬ。

彼女の愛したタリスを守るか。

それとも同じようにあの王子を守るか。

いや。

変えねばなるまい。

彼女が死ぬなどということがおきる、この時代そのものを・・・

英雄と共に、勇者として。

終

第2弾 レナ編

「・・・ナさん。・・・レナさん!」

まどろみが薄れてゆく。意識を取り戻しても、そこは薄闇。牢の中だ。

「・・・ジュリアン」

ここはサムシアンの根城の奥。デビルマウンテンの洞窟だ。

「どう・・・したんだい?・・・泣いてた・・・?」

「ごめんなさい。少し、昔のこと思い出して」

ジュリアンは水を向けてきたが、レナは話す気は無かった。解ってもらえるとは思えないし、信じてもらえないと思うから。

・

レナは幼少期をグルニアですごし、マケドニアに移り住んできた。

そして、彼に出会う。

ミシエイル王子である。

まだ青年のころ。レナもそんなころ。

いきなり火竜で乗りつけ、話の出来る者を出せといわれた。

遠乗りの途中で竜が腹をすかせたので、エサを徴発するというのだ。

腹をすかせてない日が無いような孤児院兼教会。

ヤギが2匹いるが、それがいなくなるようなことがあれば、

明日にでも飢えて死ねそうだった。

わけを話して断ると、不機嫌そうにしたものの、解ってはくれた。

オレが誰か知っているか、と言うので、そのまま答えると、

どこを気に入ったのか、その後度々教会に来るようになった。

.

ある春の日、いつものように焼き菓子などを持ってきて、子供らに配る。

話をしたいと言われて、丘のほうに連れられる。

プロポーズだった。

一国の王子であり、英雄アイオテの再来と呼ばれる青年の求愛である。

また、感謝しろだの光栄に思えだのと倣岸不遜なことを並べ立てているが、

ほのかに頬にさした赤みが可愛らしくさえある。

子供らの為の差し入れをもってきたり、多少は草花の見える丘まで連れてきたりと、

以外に素朴で、優しい。

彼の立場なら攫ってきたても面と向かって文句を言う者もいるまいに。

結局、孤児達がもう少し育ち、

ここを任せられるようになるまでは待つて欲しいと言つと、
気障な仕草で抱き寄せられた。

優雅なくせに、心の臓の音が響く。

そんなことも嬉しくて、彼の胸に耳を当てた。

背にある手にまた少し力が入った。

.

蜜月は長くは続かなかった。

暗黒戦争の序章。ドルーア帝国の復活だ。

アカネイアの危機管理能力はこの大平で無に近い。

援軍を頼んでも、属国扱いのマケドニアにまともな援助は期待できない。

マケドニアには良質の鉄鉱山があるが、
土地が痩せすぎていて作物が上手く育たない。

それをいいことにアカネイア貴族と彼らに通じる商人たちは余りものの食料を法外な値で買わせ、

唯一の特産、鉄を二束三文で買い叩く。

この関係に辟易していたミシエイルは、ドルーアと手を組むふりをし、

グルニアのカミュと通じ、アカネイアを奪った後ドルーアを滅ぼし、この大陸を手に入れる計画を立てる。

反対した父王を殺し、末の妹マリアを人質としてドルーアに貢ぎ、同時にその事実を楯にミネルバを縛りつけた。

このことはレナも勿論知り、婚約破棄の要因となった。

・

「・・・どうして、こんな・・・」

「・・・他に選択肢など無かった。このまま黙っていてもドルーアは攻めてくる。」

だがアカネイアのやつらは戦の物入りに乗じてさらに食料の値を上げるのが目に見えていた。

竜族の脅威をすっかり見据えて、人が一丸とならねばならぬときだ！」

「だから、帝国と共に聖王国を滅ぼすの・・・？」

「アカネイアのやり方は判っているだろう！？」

搾取され、虐げられ、拳句の果てに足を引っ張られて、それで真っ

先に地図から消えるのはこの国だぞ・・・
そんなことが受け入れられるかつ！！！！！！」

「それでも貴方は、人を殺しに行くのでしょうか・・・

確かに、今あの子達がひもじい思いをしていることに、アカネイアの身勝手は大いに関係しているわ。

でも、貴方のしようとしていることは戦争よ・・・？

村は焼かれ、作物は奪われ、誰も彼もが死んで、子が泣き叫ぶあの地獄を作り出して、何が救われるの・・・！！？」

「オレはこの国を・・・」

「どこでおこつても一緒よ・・・！」

本当はレナにも解っていた。ひとまずドルーアと手を組まねば、マケドニアが滅びるのだ。

ミシエイルは野心だけの男でないのはレナが誰より知っている。

それでも、もう一緒にいられない。

そばにいれば、レナは泣き伏して生きずにはいられないだろう。
そして、ミシエイルは、愛するものが自分のしたこと魂を削られゆくさまを見てゆく事になる。

別れるしか、ないのだ。

「・・・きつと、人の世を取り戻してみせる。
竜におびえずとも、大国の理不尽に泣かずともよいように。
その時になら・・・」

「・・・ええ」

そう答えながら、レナはもう断ち切っていた。
たとえアカネイア貴族が間違っていたのであっても、アカネイアの
人々は、
帝国と手を結び祖国を滅ぼしたマケドニアという国を許さないだろ
う。

少なくとも二人の命ある間に、ミシエイルの理想とした国は作れま
い。

レナは今を見抜けていないが、未来を見据えていないのはミシエイ
ルのほうだった。

自分こそ理不尽なモノに対する怒りから親殺しまでしておいて、
どうして滅ぼされた国の人々の、未来の憤怒を理解できないのだ。

・

レナが婚約を破棄したことは広まってしまふ。
人の口に戸は立てられない。

まだ年長の子でも頼りないが、自分がここにいる事の方が危ない。
レナは脱走、国境を越え、人々を救いながら旅を続ける。

そして・・・

盗賊の青年に手を引かれ、夜の山をただひたすらかけてゆく。
ジュリアンが何故そうしてくれるのか解らなかったが、今はただ、
走る。

「きゃんっ・・・」

「レナさん！？」

数日牢にいたこともあって、体がいうことをきかない上に、夜の山
である。

致命的だった。文字通りに。
あっという間に追手に囲まれ、逃げ道も無い。
幸い、ジュリアンは逃げ延びたようだった。

ひととき瞳の冷たい傭兵剣士が、微かに顔をしかめた。

「可哀想だな。死んでもらおう」

一撃目を何とか避けたが、地面に転がってしまったては次は避けられ
るはずも無い。

逆袈裟に切り付けられる。

「神よ・・・貴方の・・・とへ・・・」

辺境の女神の、救われぬ最後。

ごめんなさい。ミシエイル。

ジュリアン。

マチス兄さん・・・

・

彼女につかの間の休息さえ許さなかった神に祈り、
それで得たものは何だったのだろうか。

ただ、竜を乗り回すことに興味を持っていただけに見えた王子が、
国を憂い、本当の意味で自分を磨き始めたのは青年のとあるころ。

後世の歴史家の間では、かの王子の評価は親殺しや野心家というだけではない。

風前のともし火であった国をまとめ上げたその辣腕とカリスマは、
この時代では五指に入る。

ミシエイル王子の存在が歴史に与えた影響は、
決して小さくなどない。

終

第3弾 ミネルバ編

「兄様を・・・兄様をどこへやった！！！！返せっ・・・兄様を返せえっ！！！！！！！！」

あれはにいさまではない。

かえして。わたしのにいさまをかえして。

・

マケドニア王オズモンドはミシエイルの手によって殺された。

アカネイアに恭順して大丈夫だろうかとはミネルバも思っていたが、ドルーアと手を組んで上手くいくとは思えなかった。

ドルーアにしてみればどちらも人間の国。どうせ滅ぼすつもりに決まっている。

しかも、既に妹マリアを帝国の人質に差し出したと言うのだ。

王を平気で殺した、兄の姿を奪った魔物。

妹はならば只の捨石だ。

恭順をみせたふりをし、好機にはなんの躊躇いもなく見限るだろう。それまではマリアはドルーアでなく、ミネルバにとって人質なのだ。

魂の牢獄。

自分は、どこに行くことも出来ない。

己より大切な物が、敵の手にある。

・

オルレアン壊滅の一番槍を取らされたのはいうまでも無くミネルバ。

ドルーアに少しでも疑いを持たれたくないミネルバの必死の戦いぶり、

皮肉にもドルーアの侵攻速度を飛躍的に高めた。

憎むべき味方から疑われながら、

唾棄すべき敵に恐怖され、

妹の命を盾にされて槍を取る。

・

「・・・マルス王子？」

カチュアが話すアリティアの若者の話には、正直懐疑的だった。

いろいろな事が限界に来ていたとはいえ、

その人柄に全てをかけて、もし・・・

マリアだけは失えない。

全てなのだ。

彼女は世界と等価値なのだ。

だが、だからこそ・・・

僅かな希望に、その誘惑に逆らえない。

敵の司令官の人質を救出？

こんな勝手な申し出があるか。

しかも出来高払いの裏切りが報酬だなどと。

もし・・・

もしもこの話が上手くいくなら、

マリア以外の私の全てがどんな形で奪われようと・・・
私は捧げよう。

・

ジューコフの突撃命令はミネルバを窮地に追いやった。

まだマリアの安全が確保されていないのに、嬉々と下るわけにはいかない。

だが、そのマリアを救出する為に動いてくれるかも知れぬ部隊に槍をむけるのも言語道断。

しかも密かにマルスのみ連絡を取ったカチュアの策が裏目に出たか、その部隊のいくらかは弓を向けてくる。

「私は、マルス王子を探しているのです！」

この混戦の中、祈るような叫びもただ掻き消えた。

ミネルバは強い。しかしそれは騎士としてだ。

ミシエイルとよく似た怜悯な瞳のせいで誤解され、それゆえに歪んだ他人の心を感じる機会が少なかった彼女の心は、あまりにはかなく、初心であつた。

敵も味方も敵、降るも戦うも地獄。

ましてや死んだところで何も救えない。

知らない町で迷い子になつたような思いで、顔がくしゅりと歪む。眼には涙さえ浮かぶ。

マルスが目にすれば、あるいはシードなら。
たすけて。だれかむかえにきて。と、あゆむ少女に見えたかもしれ
ない。

だが奇怪な軌道をしながら無意味に槍をふり、血走つた眼で眉間にしわを寄せた美貌は、控えめに表しても魔女であつた。

やっとマルスが近づいて、声が届きかけた時。

「ミネルバアアアアアアアアアアアツツ！！！！！！」

オレルアンの騎士だった。彼にしてみれば国仇の血姫である。そして、多くの仲間と、誓いさえあつた親友の、

「オルガの、仇ッッッッッッ！」

騎士の魂の全ての籠った一閃のきらめきが、ミネルバの心臓に突き刺さる。

「うぐつつ!!」

正に必殺の一撃であつた。

竜共々墜ち、崩れた騎士は、もう数秒で命のもし火を消す。
身体に力が入らない。

こんなはずでは、という思考さえ纏まってくれない。

「マリア・・・」

何時以来かの涙は、美しささえ消えていた。
その眼はすでに、光を映していなかった。

すでにマケドニアに深く覆いかぶさる闇は、
またいつそう濁り、濃くなることとなる・・・

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7137x/>

天使達の鎮魂詩 revised

2011年10月19日10時06分発行